

波頭を越えて

竹島リポート

第2部 ②

標高約98メートルと168メートルの2つの島と、いくつもの岩礁で成る竹島(韓国名・独島)の総面積は約23万平方メートル。東京・日比谷公園ほどの大きさだ。平地は海岸付近のごく一部で、飲料水の確保も難しい。そこに、韓国では約2000人が戸籍上の住民登録をし、なんと1組の夫婦が「居住」している。

韓国で竹島を管轄する慶尚北道の議会は昨年10月、議員55人が船で竹島へはるばる渡り、イスや演壇なども持ち込んで「青空議会」を開催。「独島居住民間人支援に関する条例」を可決、制定した。

これにより、住民登録して1カ月以上生活した人には月70万円(約9万円)の支援金が支給され、世帯構成が2人以上なら、1人超過ごとに30万円が追加支給される。今年1月末には、現在唯一竹島に住む金成道さん(67)夫妻に、初めて100万円(約12万8000円)が支給された。

金さんは先月、「慶尚北道鬱陵郡独島里」(韓国での竹島の行政区)の里長にも就任した。つまり、国の全面的な支援を受けた「独島の防人」。竹島に観光船が接岸すれば、観光客に誘われて共に記念写真に納まる「有名人」

居住環境整備や住民登録



鬱陵島では通学路にも竹島の写真が掲げられている。「独島はわが領土」の標語も日常生活に溶け込んでいる

領有権確保狙い 実績刻む

でもある。

韓国は、1952年に「李承晩ライン」を宣言して竹島の領有権を主張すると翌53年、民間の「独島義勇守備隊」が上陸し、国旗掲揚台を設置。54年には政府が武力占拠を決定し、無人灯台を建設した。点灯式は内外へ大々的に宣伝し、竹島を描いた3種類の切手も発行した。韓国による「実効支配のアピール」が、いよいよ世界へ向けて始まったのだ。

65年には、鬱陵島の崔鍾徳さん(故人)が、国が竹島に建てた漁民宿舎へ住み込んで漁労活動を始めた。後を継ぐような形で91年から居住を始めたのが、金さん夫妻だ。

夫婦は96年、台風で家が壊れ鬱陵島へ避難したが、昨年2月末に再び竹島へ。2人の自宅には一般電話回線がひかれ、衛星放送アンテナも設置され、32インチの液晶テレビがプレゼントされた。3階建ての自宅には、自家発電機や海水を淡水化する装置なども整備されている。携帯電話の基地局も設置された。

それでも飲料水は極めて貴重で、「洗髪は雨水で2週間1回」という過酷な生活に1人1人が生計を立てている金さんは、地元紙の取材にこう答えている。「ここでの生活を続けるつもりだ。誰も文句を言わないし、むしろわいという人がない」

めたのが、金さん夫妻だ。

鬱陵郡は今年、竹島に10世帯程度が暮らせる「多世帯村」計画を進めている。竹島の「居住環境」は、国を挙げて着々と整備されている。

韓国が竹島に接岸施設を完成させたのは97年11月。現在は鬱陵警察署に所属する「独島警備隊」(約40人)が警備し、島内には監視所、宿泊施設のほか通信設備、レーダー、ヘリポートなども備えられている。昨年からヘリの発着も可能な3000トンの最新鋭警備艦「太平洋7号」が周辺海域を警戒している。

韓国政府は昨年5月、竹島に対する初めての利用基本計画を発表した。5年間で総額約42億円を投入し、周辺の環境保全や資源調査、施設拡充など「持続可能な利用」を本格的に進めるといふ。

人が住みやすいとはいえない島に巨費を投じて居住環境を整備し、警察を常駐させ、観光客をどんどん誘致する狙いは、国際法上の「実効的支配」の「実績」を積み続け、領有権を国際社会にアピールすることだ。鄭胤烈・鬱陵郡守は竹島の「多世帯村」計画を「実質的な領有権確保のため明確に答えている」。

(竹島問題取材班)